歴史地震
第17号(2001) 80-88 頁
受付日 2002/1/9, 受理日 2002/2/22

# 富士山宝永噴火の推移を記録する良質史料『伊東志摩守日記』

静岡大学教育学部　総合科学教室 *　小山真人
大谷大学大学院　文学研究科 **　西山昭仁
日本工営株式会社　コンサルタント国内事業本部 ***　井上公夫・今村隆正
国土交通省中部地方整備局　富士砂防工事事務所 ****　花岡正明

# Historical document "Ito-Shimanokami Nikki" as a detailed record of the 1707 Hoei eruption of Fuji Volcano, Japan

Masato KOYAMA
Department of Integrated Sciences and Technology, Faculty of Education
Shizuoka University, 836 Oya, Shizuoka 422-8529, Japan

Akihito NISHIYAMA
Graduate School of Literature, Otani University
Koyama Kamifusa-cho, Kita-ku, Kyoto 603-8143, Japan

Kimio INOUE and Takamasa IMAMURA
Domestic Consulting Administration, Nippon Koei Co., Ltd.
5-4 Kojimachi, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8539, Japan

Masaaki HANAOKA
Mt. Fuji Sabo (erosion control) Project Office,
Chubu Regional Bureau, Ministry of Land, Infrastructure and Transport
1100 Misonodaira, Fujinomiya 418-0004, Japan

Historical document "Ito-Shimanokami Nikki" is a diary by Sukekata Ito, one of hatamoto (group of samurai under the direct control of the Edo shogunate), who lived in Edo during the late 17th to early 18th Century. This diary contains detailed descriptions of the 1707 Hoei eruption of Fuji Volcano, which is located about 100km to the west of Edo (old name of Tokyo). This paper is a short introduction of the roots, content, and an attached painting of the diary.
Key words: historical document, diary, painting, 1707 Hoei Eruption, Fuji Volcano

## §1. はじめに

富士山の宝永噴火は，宝永四年十一月二十三日（1707年12月16日）から16日間に及んだ，火山礫・火山灰放出を主とする大規模かつ激しい噴火として知られている．

宝永噴火は，江戸近郊での大事件という性格上，数多くの記録・文書・絵図が残されている．ただし，それらの大部分は被害報告や復旧・復興に関係した文書類であり，噴火の推移そのものを克明に描いた記録は少ない．このため，火山学的な解釈や，火山防災マップ作成のた

* 〒422-8529　静岡市大谷836　電子メール：mkoyama@ed.shizuoka.ac.jp
** 〒603-8143　京都市北区小山上総町　電子メール：HZW00103@nifty.ne.jp
*** 〒102-8539　千代田区麹町5-4　電子メール：a1362@n-koei.co.jp
**** 〒418-0004　富士宮市三園平1100　電子メール：hanaoka-m85aa@cbr.mlit.go.jp

めの重要参考資料としての噴火シナリオ復元・噴火モデル分析などの研究は遅れている．

本論で取り上げる『伊東志摩守日記』は，江戸における宝永噴火の観察記録としての性格をもつ史料であり，その内容は他の追随を許さないほど詳細である．しかしながら，これまで『伊東志摩守日記』は，武者（1943）に手書きで再録されたものの他に翻刻されたものがなく，史料の所在や性格は不明であった．

今回私たちは『伊東志摩守日記』の出自や現存状況を明らかにするとともに，原本に比較的近い写本を入手することができたので，それらについて報告する．

## §2.『伊東志摩守日記』の解説

### 2.1 史料の所在

『伊東志摩守日記』は，その写本（抄本）が東京大学史料編纂所に所蔵されていることが知られていたが，原本は未確認であった．今回，日南市教育委員会および宮崎県立図書館に出向いて調査をおこなった結果，原本の所在は依然として不明であるが（戦時中に焼失した可能性あり），『嶠南文庫（きょうなんぶんこ）』の中の一冊（嶠南文庫 寄託 1035 庚戌抄書 十三）として良質の抄本が現存していることが判明した．

『嶠南文庫』とは，幕末期における日向国飫肥（おび）藩の家老であった平部嶠南（1815 − 1890）により収集・執筆・編集された各種の資史料を，後に飫肥地方の有志が回収・整理したものである．かつては宮崎県立日南高校に寄託されていたが，昭和43年以降は宮崎県立図書館に保管され現在に至っている．また，東京大学史料編纂所の所蔵本は，宮崎県立図書館保管の史料を更に筆写したものであることが判明した．そのため，今回調査した宮崎県立図書館のものは，現存している中では最良の史料と言える．

### 2.2 史料の筆者と内容

伊東氏は，伊豆国に配流された源頼朝と関わりをもった伊東祐親（すけちか）の一族とその子孫である．祐親とその子孫は没落したと言われるが，祐親の従兄弟にあたる祐経（すけつね）の子孫は後世まで日向や安積など日本各地で活躍した［盛本(2000)］．

伊東志摩守祐賢（すけかた）は，日向伊東氏から分かれた旗本伊東氏の家系にあたる．祐賢の実父祐豊（すけとよ）は，飫肥藩三代藩主伊東祐久（すけひさ）の異母弟である．祐豊は寛永十三年（1636），領地の襲封に際して，祐久の計らいにより領内から松永村（現日南市）・南方村（現宮崎市）に三千石の分知が許されて旗本となり，徳川家光に仕えた［宮崎県(2000)］．

寛文八年（1668）に祐賢は，実父祐豊の死去に伴って家督を襲封し，貞享四年十二月十八日（1688年1月20日），従五位下志摩守に叙任された．元禄二年四月二日（1689年5月20日）には領地が改められ，松永村・南方村は上知されて幕府領となり，幕府から廩米（蔵米）を拝領する旗本となった．元禄十年七月二十六日（1697年9月11日）には二千石の加増があり，近江の栗太郡・甲賀郡・野洲郡・滋賀郡の内に領地替えがなされ，五千石の領地を拝領することになった．その後，宝永五年三月八日（1708年4月28日）に43歳で死去した［続群書類従完成会(1965)，宮崎県(2000)］．

『伊東志摩守日記』には，祐賢が家督を襲封した寛文八年（1668）から，没する前年の宝永四年（1707）までの記述がある．表題には「第十三雑部／累歳録抄　伊東志摩守自筆日記」とあり，記述内容は飫肥伊東氏の分家当主祐賢の日記抄であるが，本家である飫肥藩の記述が豊富である．元禄二年(1689)に旗本祐賢領の松永村・南方村が上知され，本家の飫肥藩領との間に境界問題が生じたことや，飫肥藩五代藩主伊東祐実（すけざね）と柳沢吉保ら幕府要人との関係を知り得る数少ない史料である．他に，祐賢の娘と一族の伊東祐連（すけつら，祐崇の実弟）との婚礼，富士山の噴火，飫肥藩領内の災害などについて記述されている．

末尾のテキスト（史料1）は，このうちの富士山噴火に関する箇所の全文を翻刻したものである．かつて武者(1943)に載録されたテキストには，いくつかの誤読があることが判明したので，それを修正済みである．史料1の末尾には，飫肥藩五代藩主であった伊東大和守祐実の養子にあたる伊東祐永（すけなが）が，宝永四年十二月二十三日（1708年1月15日）に従五位下豊後守に叙任された記述なども見られる．この記述から，日記の筆者である伊東志摩守祐賢と飫肥藩主伊東大和守祐実との密接な関係をうかがうことができ，この日記が本家の飫肥藩へと伝来した経緯を考える上で重要である．

### 2.3 富士山宝永噴火の記述

『伊東志摩守日記』の宝永噴火関連部分（史料1）は，宝永四年の時点で江戸に住んでいた伊東志摩守祐賢が記したものと考えられ，前節で述べたように日記が本家である日向伊東氏へと伝来していたために，幕末期になっ

て飫肥藩の家老平部嶋南によって抜き書きされたものと考える．富士山宝永噴火に関連する宝永四年十一月二十三日（1707年12月16日）から同年十二月十五日（1708年1月7日）までの事件や自然現象描写が，20頁にわたって記述されている．

この記述内容をもちいた噴火推移の分析がなされつつあり，その経過報告［小山・宮地（2001，2002），宮地・小山（2001a, b）］がホームページ上に公表されている．なお，本史料が抄本であることから，抄録されていない十一月二十二日以前の期間の前兆現象などが原本にあったか否かは不明である．

日記の末尾には彩色された絵図（史料2）が載せられている．絵図の筆者や由来に関する説明は書かれていない．ただし，絵図の内容（富士山頂・宝永火口・愛鷹山の位置関係，および他の地名との位置関係）から判断して，富士山の南西麓での観察にもとづくものであることは明らかである．宝永火口の下には「木立堺」との文字がある．これは，宝永火口が当時の森林限界付近に開いたことを示すものである．

**謝　辞**

本研究は，内閣府富士山ハザードマップ検討委員会（荒牧重雄委員長）による富士山の噴火史料調査（発注者は内閣府および国土交通省中部地方整備局富士砂防工事事務所）の一環として行われたものである．本来ならば調査終了後にまとめて公表されるべきものであるが，記述内容の重要さや，史料自体の入手や閲覧が困難となっている点などを考慮し，現在進行中の調査に直接役立つ面が多いと判断されたため，先行して公開することとした．快く公表許可をいただいた関係者に対し，深く感謝する次第である．

**文　献**

小山真人・宮地直道，2001，史料からみた宝永四年（1707年）富士山噴火の推移．富士山ハザードマップ検討委員会第1回基図部会委員提出資料（http://www.bousai.go.jp/fujisan/h_map/kentou/kizu/001/siryou/siryou1.pdf）

小山真人・宮地直道，2002，史料からみた宝永四年（1707年）富士山噴火の推移（改訂版）．富士山ハザードマップ検討委員会第3回基図部会委員提出資料（http://sk01.ed.shizuoka.ac.jp/koyama/public_html/Fuji/HoeiSuii.pdf）

宮地直道・小山真人，2001a，宝永四年（1707年）噴火に伴う噴出物の形成時間と噴出率の推移．富士山ハザードマップ検討委員会第1回基図部会委員提出資料（http://www.bousai.go.jp/fujisan/h_map/kentou/kizu/001/siryou/siryou1.pdf）

宮地直道・小山真人，2001b，宝永四年（1707年）噴火に伴う噴出物の形成時間と噴出率の推移（2）．富士山ハザードマップ検討委員会第2回基図部会委員提出資料（http://www.bousai.go.jp/fujisan/h_map/kentou/kizu/002/siryou/siryou1.pdf）

宮崎県，2000，宮崎県史 通史編 近世上，650-561．

盛本昌広，2001，伊東氏由緒の形成，伊東の今・昔－伊東市史研究－，1，42-63．

武者金吉，1943，増訂大日本地震史料，第二巻，文部省震災予防評議会，754 p．

続群書類従完成会，1965，新訂 寛政重修諸家譜 第十四，247-251．

第十三雑部

累歳録抄　伊東志摩守自筆日記

一十一月廿三日、夜中より空曇、夜明候得而も曇有之候、
二三日此方、毎日曇候得共、少々晴候、丸雪少々降候日も有之候、雨は
當月十日之晩ニ降候後、降不申候、
巳刻時分ヨリ南西之方ニ青黒き山之ごとく之雲多く出申候はゞ、地は震
不申候へ而震動間もなくいたし、家震、戸障子強鳴申候、風少も吹不申候、
午之刻時分ヨリ南之方ニ而雷鳴出、黒雲之内稲光強いたし候、雷鳴可申
前ニは、震動強いたし候、北之方江も白雲次第におゝい、惣天曇、午之
中刻ヨリねずみ色のはいのごとくの砂多く降申候、南西之黒雲少
は薄成申候、未之刻時分ヨリ震動少止申候、空は厚白曇ニ成、南之
方ニて時々鳴、稲光夜中いたし、雷鳴可申前ニハ動揺いたし候、遠
天ニて鳴雷之ひゞき強、地動き戸障子なり申候、雷聲ことの外長ク
有之候、夜に入候へ而降候砂色黒く、常之川砂成、晝夜降候砂、凡二
三分程つもり申候、四ツ時ヨリ空少々晴、星出、砂降申候、夜半ヨリ常之如
月出候、北東は晴、西南は黒雲退不申候、七ツ半時震動強いたし、
西南之方稲光いたし、雷鳴申候、七ツ半過ヨリ西風吹出シ、明六ツ
前迄吹申候、風出候はゞ震動和申候、六ツ前風止申、少づゝ吹申候、
一翌廿四日、朝六ツ時之天色、北之方ハ晴、西南黒青き雲厚出、東之
方江も少々右雲廻り申候、昨日之通り震動いたし、西南之方ニて
雷鳴稲光いたし候、西之方ハ北之方、次第ニ黒雲退晴候、五ツ時ヨリ日、天
中晴候処へ登候故、日光出申候、四ツ前ヨリ雷聲止、動揺もやみ申候、
南之方黒雲は晴不申、九ツ過より西風少々吹、午之刻過ヨリ西南之
方薄青雲、東之方江次第廻り天中迄、白薄雲候、西風少々吹、北之
方西半分は晴申候、七ツ時ヨリ又震動少々いたし候、西風日入前より
止申候、夜入五ツ前少々強地震ゆり申候、地震いたし、震動少々
やみ、時々少々づゝいたし候、風少も不吹、星出候得共、光無之候、南西之方黒雲登、
半天ニおゝい有之候、南之方ニて稲光強、雷聲時々いたし候、九ツ前ニ
少々地震いたし候、震動時々少づゝいたし候、南之方ニ而雷聲、時夜中
いたし候、稲光いたし候、西之方半分程、南は一面ニ、東之方江も黒雲
かゝり申候、
一廿五日、朝天色、西之方半分程、南一面、東之方江雲廻り黒く雲、次第ニ
天中ニおゝい、日光をおゝい申候、北は晴申有之候、雷夜中の通り時々
南方ニて鳴り、地ニひゞきいたし候得て、戸障子ニひゞけ申候、雷聲
長く鳴申候、四ツ時ニは次第ニ黒雲東江廻り、天中江南ヨリ押出し候、
風少も無之、震動は止申候、九ツ時ヨリ黒雲東之方江廻り候、雷時々
如前ニ鳴申候、八ツ過時々天半余曇、東南之方如霧ニ有之、近家も
見分無之候、七ツ時ヨリ黒き砂少づゝ降申候、雷も時々南之方ニ而鳴申候、
日暮候はゞくらく有之、少之先も見江不申候、八ツ半前ニ砂降止申候、
北之方空晴申候、夜中時々南方ニて雷鳴候、おとニ遠近有之候、

夜中風少も吹不申候、

富士の狂歌

鳴音は　あらおもしろや　神遊び　道すなをにて　天下太平
あし高や　富士と三里に　灸すへて　氣をひきさげて　下はうるおひ

時行風の歌

これやこの　行も帰るも　風吹て　しるもしらぬも　みなせきにけり

一廿六日、朝南東ヨリ黒雲天中半余おゝい、北之方斗晴申候、辰下刻ヨリ南風少々吹、黒雲次第おゝい出、黒き砂頃日ヨリは大きく栗つぶ程の多降、屋根へ落候ニ、雨のごとくにおといたし候、雷時々東南ニて鳴候、晝過ヨリ天中之黒雲少々薄なり、日光のかげ見江申候、東ヨリ黒雲北之方江廻り黒雲厚おゝい申候、雷聲は八ツ時ヨリ鳴不申候、暮六ツ時前ヨリ少砂小降ニ成申候、天中之黒雲薄有之、昨夜程ニくらく無之候、夜九ツ半時ヨリ砂降止候、砂二三分もつもり申候、天中少晴申候、雷時々東南之方ニて鳴申候、頃日ヨリは雷聲遠きこへ間遠ニ鳴申候、夜中ヨリ西北之風少々吹申候、

一廿七日、東南黒雲退、四方一面ニ白雲ニなり、雪降空のごとくに有之、西北之風少々吹申候、頃日ヨリ天色静ニ見江申候、晝前ヨリ東南之方ニ薄黒雲出候へ而、次第ニ北之方江黒雲東ヨリおゝい申候、風少も吹不申候、七ツ時ヨリ北風少々吹、北之方江おゝい候黒雲、南之方江廻り、北之かた晴、右黒雲天中ニおゝい、七ツ半時ヨリおゝい、黒き砂降申候、次第ニ黒雲南江行、夜四ツ半時ヨリ砂降止、空少々晴、星出候、夜中時々震動いたし候、雷聲遠少々きこへ申候、時々ニ、

一廿七日ニ江島岩本院ヨリ状被差越、如此被申越候、

一筆啓上仕候、其御地御静謐ニて、御手前様彌御堅固被成御座候哉、承度奉存候、然者當地一昨廿三日之暮ヨリ大雷石降、同夜夥敷雷鳴砂降震動、戸障子響、翌廿四日朝少晴、巳之刻過夥敷雷鳴砂降震動、月夜ヨリ昏、燈用申候、終日砂降、雷電強響、夜入迄止不申候、今廿五日止候得共、于今雷鳴響動止不申、落付不申候、併上下無恙罷在候、其元如何御座候哉承度存、飛脚申上候、取込早々申残候、恐惶謹言、

十一月廿五日夜　　岩本院　書判

伊志摩守様
人々御中

一廿八日、朝霜多降申候、北之方晴、南之方曇申候、五ツ半前震動余程致、四ツ時ヨリ惣天白薄曇候、雲薄故日光は有之候、東南薄黒雲少も不退つかへ、終日天半分内ニ有之候、北西は晴申候、夜中雲右之通ニて、東南之方ニて雷聲遠く時々いたし候、

一廿九日、冬至朝霜余程降候、東南ニ薄黒雲出不退有之候、西北は晴申候、晝時より次第東南之薄黒雲、天中江おゝい、日光を覆申候、北風少々吹申候、七ツ時ニは黒雲天中ニおゝい、西北も白雲ニなり申候、暮六ツ時、東南之方ヨリ薄黒き雲、天中江押おゝい、星も見江不申候、西北之方は白雲ニ成候、風よい之内は少も吹不申候、四ツ半時

より砂少々降、七ツ過時迄降候へ而止候、八ツ半時、震動時々いたし、稲光度々致候、雷時々東南之方遠天ニ而鳴申候、七ツ半時ヨリ雨降出し候得て、震動雷止申候、

一駿河富士郡吉原宿問屋年寄ヨリ注進書之趣、寫シ

昨廿二日晝八ツ時ヨリ、今廿三日五ツ半時迄之内地震無間も三十度程震、少々残候半潰之家、又候震潰申候、其上同四ツ時ヨリ富士山夥敷鳴出、其響、富士郡中江響渡り、大小之男女共絶入仕候者多く御座候得共、死人は無御座候、然處ニ同山雪之流、木立之境より夥敷烟巻出、猶御山大地共ニ鳴渡り富士郡中一篇之煙と二時斗うず巻申候、如何様之儀共不奉存候、人々十方を失罷在候、晝之内は煙斗と相見へ候、暮六ツ時ヨリ右之煙皆火煙ニ見へ申候、此上いか様之義ニ可罷成も不奉存候、右之段乍恐御注進申上候、以上、

駿河富士郡吉原宿
問屋
年寄

十一月廿三日

一廿日、朝南東黒雲退、四方白雲ニ成、雨降申候、少々之間止候得ては又小降ニ雨降申候、北風少々づゝ吹申候、晝九ツ過ヨリ雨止、薄曇りニなり、雲中ヨリ日光差出申候、夕方ニ成西北晴申候、東南ヨリ薄黒き雲、天半内ニおゝい有之候、薄黒き雲之内ニ白雲引はへ、黒雲之内とぎれ有之候、頃日之ごとく根黒き雲は無之候、暮候へ而四ツ過ヨリ砂少々降出シ、四ツ半過迄ふり申候へ而止申候、夫ヨリあかるくなり申候、又八ツヨリくらく黒雲おゝい出、砂多く七ツ迄降、六ツ前迄ニ少づゝ降、夜明候へ而止申候、夜中風吹不申候、

一年代記ニ　桓武天皇　延暦庚辰十九年三月十四日ヨリ四月十八日迄、富士山のいたゞき、ゆへなふしておのづからもへて、晝は煙くらく山をかくし、夜は火のひかり天をてらす、其音雷のごとし、灰をふらす事雨のごとし、山下のかすい血のごとし、

宝永四年迄　九百五年ニ成候

一年代記ニ　清和天皇　貞観甲申六年五月、富士山もへて十日餘り火消ず、山上のばんじやく崩て海をうづむ事廿里斗なり、浅間の方よりもへ出で、後ニは甲斐国之方へ焼うつる、

宝永四年迄ニ　八百四拾四年ニ成

一十二月朔日、朝薄黒き雲東南ニひきはへ候、根黒き雲不出候、西北は晴候、四ツ時ニは惣天白雲ニ成、東之方ヨリ黒雲天中江登り、日光をおゝい、西ヨリ東へ薄黒き雲大筋立曇り、霧降候様ニ成候、夕方ヨリ西北之方少々晴、西ヨリ東へ黒雲引はへ申候て、少薄くなり霧のごとくに有之、隣家も見へ不分候、六ツ時西北は晴、星出、東南は曇り申候、北風少々吹申候、夜五ツ半時西北晴、星出候、西南之角ヨリ薄黒き雲、東之方江引はへ有之候、夜中西北は晴、東南は薄雲り有之候、

一二日、朝四方白雲ニ成候、東南村雲立、雲切いたし候、風吹不申候、四ツ前ヨリ四方雲晴、頃日ニ無之晴ニ而日光出候、北風少づゝ吹候、七ツ時前ヨリ、西南之角ヨリ黒雲、東之方江引はへ、日光をゝい、次第ニ南東曇り候、夜中彌曇り、四ツ半過候時分ヨリ七ツ前迄、少づゝ砂降申候、風は無之候、

一三日、朝西北之方は晴、西南之角ヨリ黒雲、南東江引はへ、黒雲村々立有之候、日光を終日雲おゝい、夕方東南霧煙之如くニ有之候、夜中東南は曇り、西北は晴、星出申候、風吹不申候、砂降不申候、

一四日、昨朝之空之如くニて霧煙深く下り、隣家も見わけがたく候、四ツ時ヨリ段々白曇りニ成、四方一面ニ曇り、日光不出候、川ことの外鳴申候、九ツ過地震少々ゆり、黒雲少々薄なり、雲中ヨリ日光薄出候、九ツ半時ヨリ砂少々降候、八時は惣天白雲ニ成候、川鳴止不申、八ツ半前ヨリ南風吹出シ候へ而、川鳴少々止候、南風暮六ツ半時ヨリ段々止申候、薄曇り星所々ニ出候、九ツ時少之間砂少々降申候、其後空晴、星見へ候、七ツ少前ニ地震少々ゆり候、夜中風吹不申候、

一五日、朝西南角ヨリ南東江薄青黒雲引はへ、西北は晴、九ツ過ヨリ西南之風吹出、南西ヨリ黒雲押出シ、日光おゝい曇候、八ツ過ヨリ西北之風少々出、雲晴、夕方ヨリ又黒雲登り、一面ニ曇り、星出候、四ツ過ヨリ北風強吹出、夜明方迄吹申候、黒雲南之方江吹入、白曇りニ惣天なり申候、

川崎とつか邊江石砂降申候と申候、石駕石のごとくの焼石、色ねづみ色、やけ石故軽候、五六分四方、大小有之候、大き成はりんご程候由、砂もあらく候、壹坪ニ九斗壹石も降申候、富士近所程石多大き有之、砂多く降申候、

一六日、朝北風少づゝ吹候、黒雲南之方江吹入、南之方根ニ黒雲少々有之候、惣天白曇りニ成、日光不出寒氣強有之候、如頃日之東南より黒雲、東江今夕は引はへ不申候得て、一面ニ白曇りニ成候、風吹不申候、夜中晴、北風少々吹候、

一七日、朝村雲出、東南ニ黒雲少々切々ニ出、北風少々吹候所ニ、四ツ時より北風強立、村雲南方江吹入、七ツ半時ヨリ風少々止、夜入風無之、夜中晴、月星さへ出ル、

一八日、朝惣天晴、南之根ニ青黒薄雲少々有之、四ツ時ヨリ村雲出、北風少々吹、八ツ時止、白曇りニ惣天なり、南之方ニ青薄黒雲引はへ申候、根はすき有之候、寒氣強シ、

一九日、朝ヨリ四方白曇りニ成、日光不出、東南ニ黒雲引はへ不申候、終日寒氣甚敷有之候、夜中四ツ前ヨリみぞれ降、夫ヨリ雪ニ成、夜中降申候、北風吹候少々、

頃日、駿河ヨリ注進ニ、富士未焼候得共、和ニ有之候、石などハ最早降不申候由也、并富士焼申候繪圖、駿州御代官ヨリ公儀到來候寫シ也、

九日朝六ツ半時ヨリも焼申候、煙止申候、〈八日夜五ツ半前、夥しく震動いたし、夫ヨリ富士焼止申候由也、〉

一十日、朝四方曇、雪降申候、四ツ前ヨリ雪止雲晴、日光出ル、夜中ヨリ降候雪、七寸つもり申候、八ツ過ヨリ白曇りニ成、日光おゝい、寒氣つよく有之候、夜中七ツ時ヨリ北風強吹出、六ツ前ヨリ少々和吹申候、

一十一日、朝白雲ニ惣天成、北風吹申候、四ツ前ヨリ雲切致、村雲立、北は晴申候、北風終日強吹、村雲退晴候へて、暮六ツ時ヨリ風止申候、夜中風無之、晴天、寒氣甚敷有之候、

一十二日、朝晴天風無之、終日一天ニ雲無之、晴閑ニて寒氣は強有之候、夜ニ入月星さへ出ル、夜中風無之靜也、

跡月ニも當月ニも無之空合、快晴之日和ニて有之候、

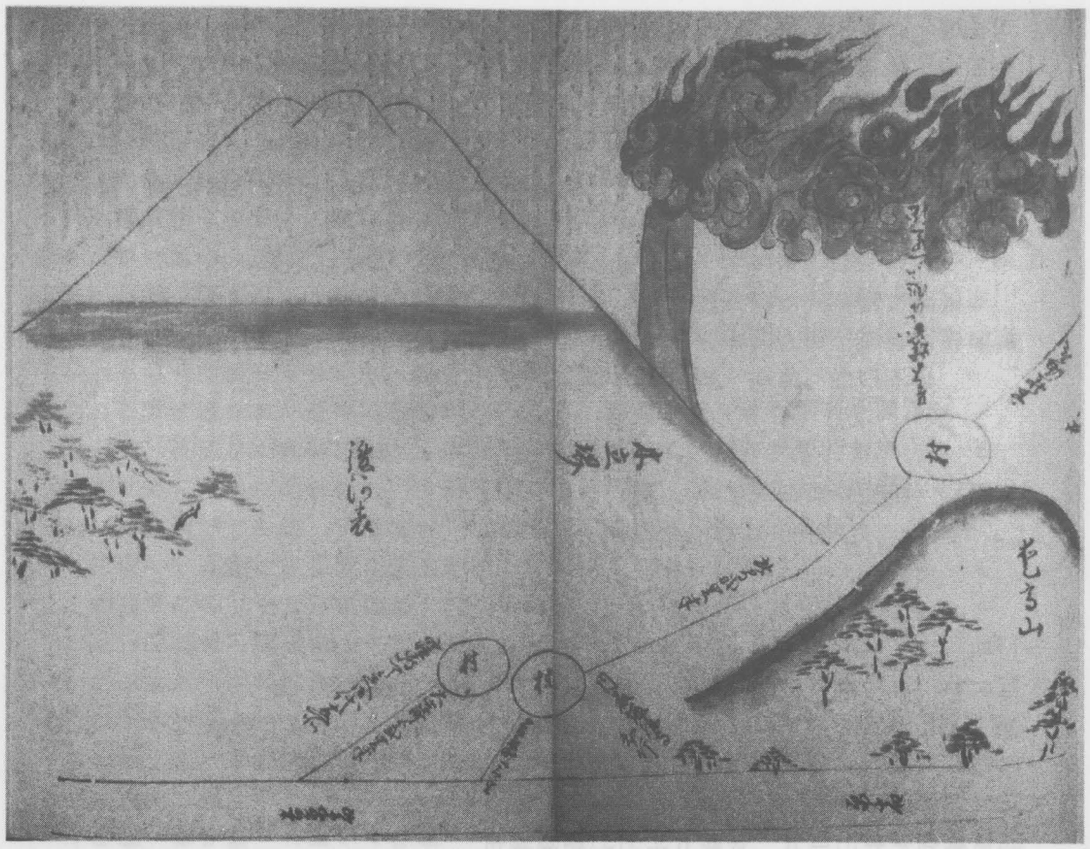
一十三日、惣天晴、陽氣立登申候、八ツ時ヨリ南風少々吹出ル、暮時ニ吹

止申候、夜中五ツ過ヨリ北風よほど吹出、寒氣強、九ツ過ヨリ風止申候、
一十四日、寒入、晴天、四ツ時ヨリ東南之方ヨリ白雲出、日光をおゝい、晝時ヨリ
一面ニ白曇りニ成、夜ニ入四ツ前少々雪降止候、風吹不申候、
一富士山、頃日焼止候注進候由、
一十五日、朝惣天白雲ニ有之、五ツ過ヨリ雲切いたし、日光出晴、風無之、閑、夜
ニ入月星さへ出ル、夜中風無之靜有之候、
一富士山之すそに、去月廿一日ニ大穴明き申候ニ付、百姓共不審ニ存、
三百廣程之縄を下ケ見申候へ共、中々届申候様成事ニ而無之、
夥敷鳴出候故、百姓過半府中江退候故、跡之事は不知候由、
相州辺は、砂石、壹丈貳尺余降申由也、

〔絵図〕（原図写真を史料2に別掲）

十二月
一同月廿三日、晝八ツ過、伊東大和守家來聞番役佐右衛門助より、
政右衛門方江手紙ニ、今日伊東求馬被為出仕候処ニ、諸大夫ニ被仰
付候、此段知せ申候、并右之祝義として音物差越候義は、用
捨候様ニ被申越候、依之祝義物不遣候、祝ニ使者遣シ申候、
伊東靱負も廿三日ニ、求馬ニ付出仕被致候由、

宝永四丁亥年
一五月十五日、伊東大和守ヨリ明日用事候間、宅江参候様ニ被申
越候故、十六日大和守方江参候次而ニ、山王別當観理院江寄
御誕生御安産之御祈祷頃日頼候ニ付、式臺迄参口上相應ニ申
歸候ニ、〈御祈祷何も被頼候へ而は、御祈祷執行可有之候、禮旁参候由故参候、〉
登り坂上り候ニ、息切仕申やうやう靜ニ
上り取申候、



東
印野海道
愛高山
村
是ヨリ焼出シ候処江三里程
原宿
此間貳里半
内藤筑後守知行
村
吉原町へ三里
村
大宮町ヨリ貳里半
窪嶋天兵へ御代官所
吉原宿
木立堺
駿河表

史料２　『伊東志摩守日記』の末尾に付されていた絵図（原図は噴煙の部分のみ赤く彩色されている）．絵図中の文字を翻刻したものを下に示した．